

(第Ⅲ様式期新段階～第Ⅳ様式期古段階)だけの現象なのか、またここに捨てられた剥片だけに認められる現象なのか、データの蓄積を待って結論を下したい。

さて、今回の調査で出土したサヌカイト製の石器はすべて喜志遺跡内で製作したと考えられるが、分析対象にした整地層出土の剥片では最も大きな剥片でも最大長105mm、最大幅140mm、また、石核の最も長いものでも135mmしかなく、打製石剣を作れる大きさのものは見つからなかった。しかし、製作途中の事故品の存在から打製石剣を遺跡内で製作していることは確実である。それではその素材をどのような形で獲得したのか？問題として残したままである。

以上のような問題を残したままではあるが、今回出土した整地層の石器資料がどのような意味をもつのかを考えてみたい。少なくとも剥片類については、一般的な割れ方しか示しておらず、石器製作中の石屑的な、すなわち廃棄処分のものでしか評価を与えることができないが、石器類については製品としてまだまだ使えるものが出土していることから単に捨てたとは考えがたい。つまり、これらの整地層から出土したものは石器製作址からだけではなく、それ以外の場所からのものも含まれている可能性があるということである。ただ供伴土器の時期が第Ⅲ様式期新段階から第Ⅳ様式期古段階と限定されることも考え合わせると、石器製作址に近接した集落址、もしくは集落址内の石器製作址から整地層の土がもってこられたと推測できるであろう。

(栗田 薫)

(註)

1. 属性分析の方法は次の文献によっている。

山中 一郎(1994)『石器研究のダイナミズム』, 大阪文化研究会。

4-3. 石川中流域、段丘上の埋没古墳

1. はじめに

石川中流域の段丘上の埋没古墳の存在に関心をもたれたのは、大阪府教育委員会の調査で検出された「新堂古墳」が最初であろう。それ以前に消滅時期の分かる段丘上の古墳として川西古墳の記録が残されていたが^(文献1)、現存する新家古墳を除いて、段丘上に古墳が点在する景色は想像されていなかったといっても過言ではない。

新堂古墳の調査による周濠らしきものの発見は段丘上に埋没古墳が存在する事を暗示させた。しかしながら、この調査と前後して数度の調査で埴輪片がパラパラと出土しているものの、その出土量の少なさと確実な遺構の未検出から、埋没古墳への関心はもたれたものの、議論されることはなかった。そんな中、今回、喜志遺跡の調査で、多量の埴輪が出土したことにより、改めて埋没古墳の存在を考えてみる必要が生じた。そこで既往の調査における埴輪の出土例を紹介することで、石川中流域における埋没古墳の状況を改めて考えてみたい。

2. 既往の調査における埴輪出土例

出土例1・^(文献2)

1979年、大阪府教育委員会によって、羽曳野市東阪田に所在する石川の形成した下位段丘面の南端部が分譲住宅開発にともなって調査された。遺跡名は「東阪田遺跡」である。埴輪は調査区の南西部で検出された土壙(SK-01)と調査区南部中央隅で検出された土壙(SK-04)で出土した。

土壙(SK-01)からは人物埴輪を含む多量の埴輪と1点の須恵器が出土している。これらの所属時期は須恵器の杯身から5世紀末と比定されている。

土壙(SK-04)からは多量の埴輪と少量の土器片が出土している。埴輪は小片であるというものの、円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、楕形埴輪が確認されている。円筒埴輪はやや斜行する縦ハケで調整されていること、円筒埴輪の中に須恵質のものが存在すること、及び出土土器の時期から合わせみて6世紀前半に属すると結論づけられている。

なお、この調査区では古墳時代前期に比定されている土器棺墓も3基、検出されている。

出土例2. (文献3)

1980年、羽曳野市教育委員会が出土例1のすぐ南側を調査した。遺跡名は「東阪田遺跡」である。埴輪は調査区の中央部西辺にある方形の土壙(SX1)から出土している。埴輪の詳細は不明である。

出土例3. (文献4)

1978年、大阪府教育委員会が喜志小学校の北方200m、東高野街道から東に100m下った地点で、「喜志遺跡」の東縁にあたる斜面地を調査した時に盛土から埴輪が検出されている。埴輪は須恵質の円筒埴輪で、断面M字形のタガがめぐる。外面調整は斜めハケの後、横ハケが施されている。

出土例4. (文献4)

1978年、大阪府教育委員会が下水管埋設工事に伴う調査(Bトレンチ)を行ったときに埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で、Bトレンチと設定された調査区の盛土から検出されているが、6世紀前半に比定されている。

出土例5. (図版27, 図-51)

1986年、富田林教育委員会が下水道管埋設工事に伴い、今回の調査区の南西隣、中位段丘上を調査した。遺跡名は「喜志遺跡」である。調査区は東西方向にのびる開析谷の真ん中にあたり、埴輪はこの谷の中から検出された。

今回の調査区はこの時の調査区で検出した開析谷の続きにあたり、また、埴輪の出土状況も今回の出土状況と類似する。出土した埴輪は円筒埴輪と蓋形埴輪があるが、出土量は少ない。

円筒埴輪(1, 3~7)は口径28.8cm、底径12.5~15.7cmを測る小型品ばかりである。タガの断面は低い四角形、台形その他、三角形も認められる。外面調整は粗い縦ハケ一次調整だけで、二次調整の横ハケの施されたものはなかった。基底部の調整は施されているものと施されていないものがある。

蓋形埴輪(2)は1点だけ出土している。軸受け部の破片であるが、口縁部に凸帯が貼り付けられている。口頸部の調整は横ハケ調整である。

この調査区で出土した埴輪は、今回の調査区であるKS94出土の埴輪と類似している。埴輪の所属時期は5世紀後半から6世紀初頭に比定できる。

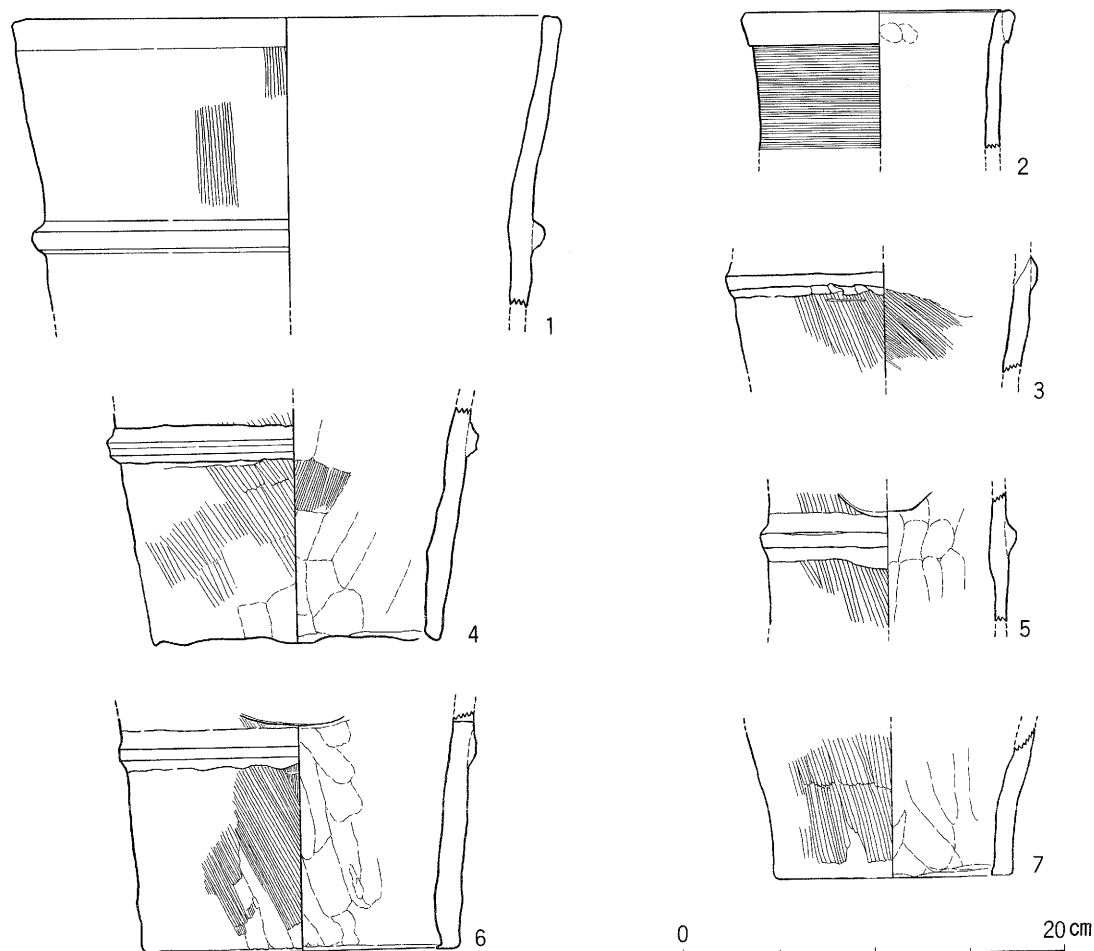


図51 喜志遺跡(KS86地区)出土の埴輪

出土例6.

1985年、富田林市教育委員会が喜志町2丁目を調査した時に埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志西遺跡」である。調査区の小字名が「高塚」で、今回の調査区と同じである。埴輪は円筒埴輪で中世の東西溝から出土している。

出土例7. (文献5)

1991年、富田林市教育委員会が喜志駅東口新設工事及び喜志バイパス道路事業に伴う調査で包含層から埴輪が出土している。遺跡名は「喜志西遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で5世紀後半～6世紀初頭に比定できる。

出土例8.

1990年、富田林市教育委員会が住宅建設に伴う調査で埴輪が検出されている。遺跡名は「喜志西遺跡」である。埴輪は円筒埴輪で、包含層から出土している。

出土例9.

1990年、富田林市教育委員会が桜井町2丁目に所在する店舗建設に伴う調査で古墳時代の溝から

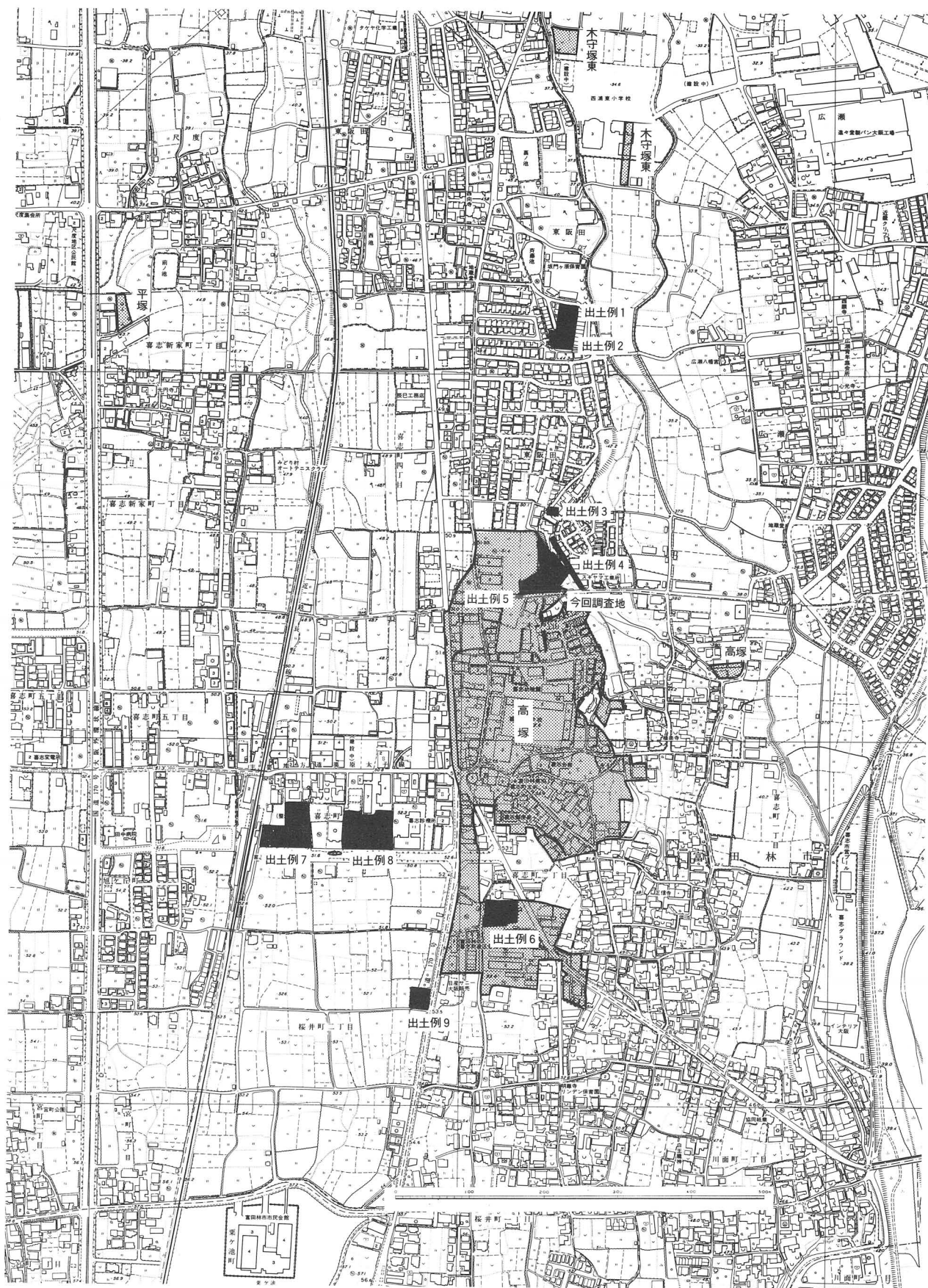


図52 喜志遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布図状況

1点だけであるが出土している。遺跡名は「桜井北遺跡」で、前述の出土例4の地点から南西部に約150m離れた地点にあたる。

出土した埴輪は円筒埴輪で外面調整にB種横ハケの施されていたもので、所属時期は5世紀後半に比定できる。

出土例10. (文献6)

1981年、大阪府教育委員会が国道170号線の歩道設置に伴う調査を行った時にCトレンチから古墳が検出されている(註1)。遺跡名は「中野遺跡」である。「新堂古墳」と名づけられているが、墳丘と考えられる高まりと周溝と考えられる落ち込みが検出され、落ち込みからは埴輪と須恵器などが出土している。これらの所属時期から6世紀前半の時期が与えられている。

出土例11. (文献7)

1979年、富田林市教育委員会が大谷女子大学資料館の協力で行った調査で埴輪が出土している。遺跡名は「中野遺跡」である。埴輪は2点あるが、1点は石列暗渠(SD-004)から、あと1点は表採資料である。前者は形象埴輪で、後者は円筒埴輪である。形象埴輪は磨滅が著しく、器種も不明である。円筒埴輪はタガがかなり崩れていて、残存部の復元径から推測する限り小型品と考えられる。外面調整は縦ハケが施されている。これらのことから所属時期は6世紀前半と考えられる。

なお、この時の調査で6世紀に比定されている土壙墓が2基、検出されている。一つは土壙1(SK-001)で、楕円形のプランをもつ。内部から須恵器の甕と土師器の鍋片が出土している。あと一つは土壙(SK-003)で不整形なプランをもつ。内部から2個体分の口頸部を欠く須恵器の甕の破片が出土している。報告者は遺存状況に問題を残すとしながらも、甕棺としての機能を考えている。

出土例12. (文献8)

1981年、富田林市教育委員会が国道170号線と東高野街道に挟まれた地域を調査した時に、古墳時代の溝と包含層から埴輪が検出されている。遺跡名は「中野遺跡」である。埴輪は合計14点出土しているが、すべて円筒埴輪で外面調整に斜方向の縦ハケ一次調整が施されているだけで、二次調整は認められない。タガの突出度も低く、黒班の認められるものもない。須恵質のものが混じる。これらのことから埴輪の所属時期は6世紀前半に比定できる。

出土例13. (文献9)

1992年、富田林市教育委員会が「寺内町遺跡」(G C 91-4)を発掘調査を行った時に近世のピットから埴輪が1点出土している。埴輪は円筒埴輪の口縁部の破片で外面調整に横ハケが施されている。小片であるから断定できないものの、埴輪の所属時期は5世紀後半と考えられる。

出土例14. (文献9)

1992年、富田林市教育委員会が「寺内町遺跡」(G C 91-2)を発掘調査をおこなった時に包含層から埴輪が1点出土している。埴輪は円筒埴輪で、タガは断面が偏平な台形で、外面調整はBd種横ハケが施されている。これらのことから埴輪の所属時期は5世紀後半に比定できる。

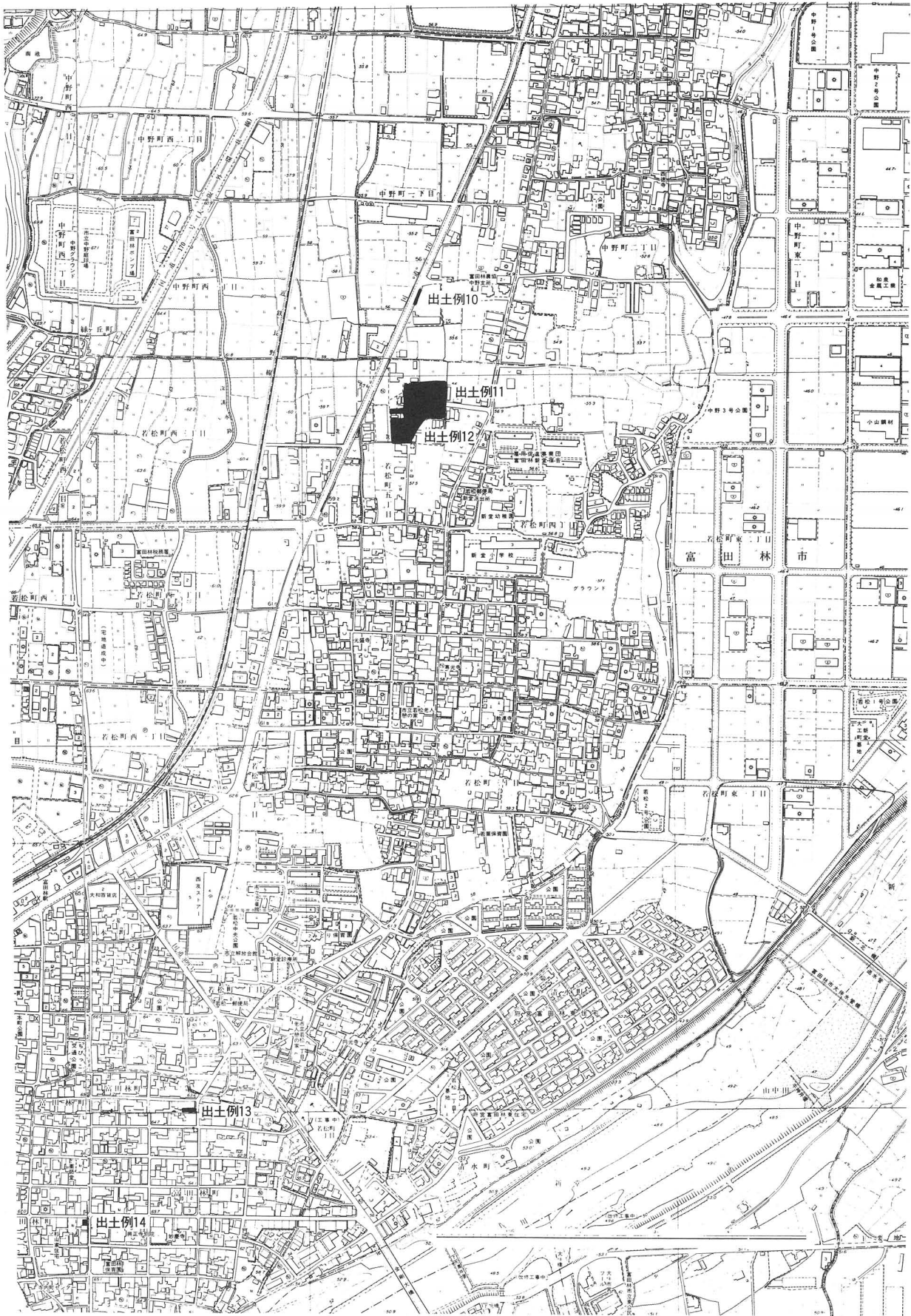


図53 中野遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況

出土例15.

1990年、富田林市教育委員会が行った調査で包含層から埴輪が1点出土している。遺跡名は「新家遺跡」である。現存する「新家古墳」の北西70mの所である。円筒埴輪の外周調整は縦ハケ一次調整だけが施されている。

なお、新家古墳からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、甲冑形埴輪などが採集されている。円筒埴輪は実測図から判断すると、かなりしっかりとした断面四角形のタガがめぐり、外周調整に斜め方向のハケが施されている。底部を1段目とすると2段目の半ばまでしか残っていないので、断定できないが底径が18cmということから、中型品に近い小型品ということができる。また、黒班も認められることから(文献1)、前述の新家遺跡から出土した埴輪はこの新家古墳よりも後で造られた古墳のものと考えられる。

また、前述の埴輪出土地点から南約150mの地点で国道309号線建設に伴う調査を大阪府教育委員会が行っているが、その時に古墳時代から鎌倉時代にかけての土壌墓が総数433基検出されている(文献10)。

出土例16～18.

1928年に消滅したと記録されている「川西古墳」と、その周辺の埋葬施設を含めてここで紹介する。「川西古墳」は明治維新前に一度発掘され、1928年、敷地整備で墳丘が破壊されたが、その直前に、末永雅雄氏によって、遺物の採集と墳丘見取り図作製が行われている。この時の記録によると川西古墳は直径20m、高さ3mの円墳で、墳頂から約1m下方のところに小竪穴式石室状の内部構造が設けられていたこと、石室内部から鉄製の眉庇付冑、短甲、鉄刀、鉄剣、鍬、金銅金具などが出土したと記されているが、ここにある記録の様子は二次埋葬の結果らしく、古墳築造当初の埋葬状況を示すものではない(註2)。しかし、副葬品自体は川西古墳のものと考えられることから、古墳の所属時期を5世紀中葉から後半に比定されている(文献1)。その後、1989年府営住宅の建て替えに伴う大阪府教育委員会の調査(出土例16)で、川西古墳の周濠と考えられる溝が(文献11)、1991年、1992年には市営住宅建て替えに伴う富田林教育委員会の調査(出土例17)で、1989年の大阪府教育委員会調査時の溝に続くと考えられる溝が検出され、その結果、この古墳が外周溝をもち、墳丘が帆立貝式もしくは造り出し付き円墳であったことが確認されている(文献12)。

出土した埴輪は円筒埴輪と形象埴輪があるが、形象埴輪は家形埴輪、草摺部分が出土しているが、種類も数も少ない。円筒埴輪は大型品、中型品、小型品と様々なサイズが混在するが、小型品が圧倒的に多い。外周調整はB種横ハケの施されたものと、縦ハケ一次調整だけの両方が認められるが、大型品についてはすべて二次調整が認められる。半須恵質のものもあり、所属時期は5世紀後半に比定されている。

「川西古墳」の外周溝の外側からは円筒埴輪棺が3基、検出されている。それらのうちの1基は外周溝の肩部から(文献11)、他の2基は南部で(出土例18)で検出されている。なお、後者の2基の埴輪棺が出土した地域の遺跡名は「錦織遺跡」である。この2基の円筒埴輪棺のうち、1基(円筒棺1)は棺の周囲を河原石で取り囲む構造を呈している。あと1基(円筒棺2)には須恵器の蓋杯が副葬されていて、その時期から6世紀中頃と比定されている(文献12)。

また、1989年に大阪府教育委員会が行った調査区では、これら周濠と外周溝の他に溝が2本(溝

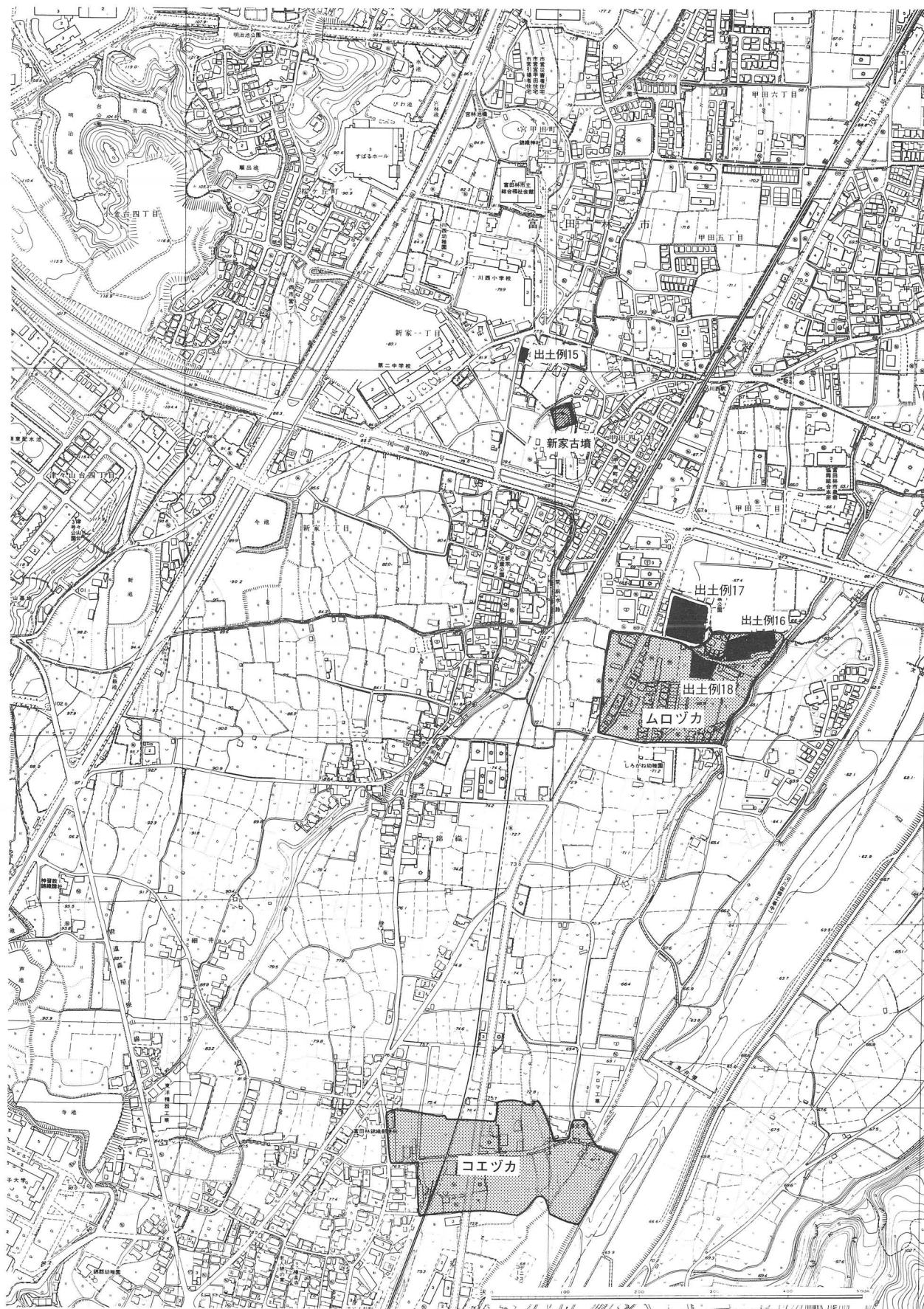


図54 甲田南遺跡周辺の埴輪出土地点と小字名の分布状況

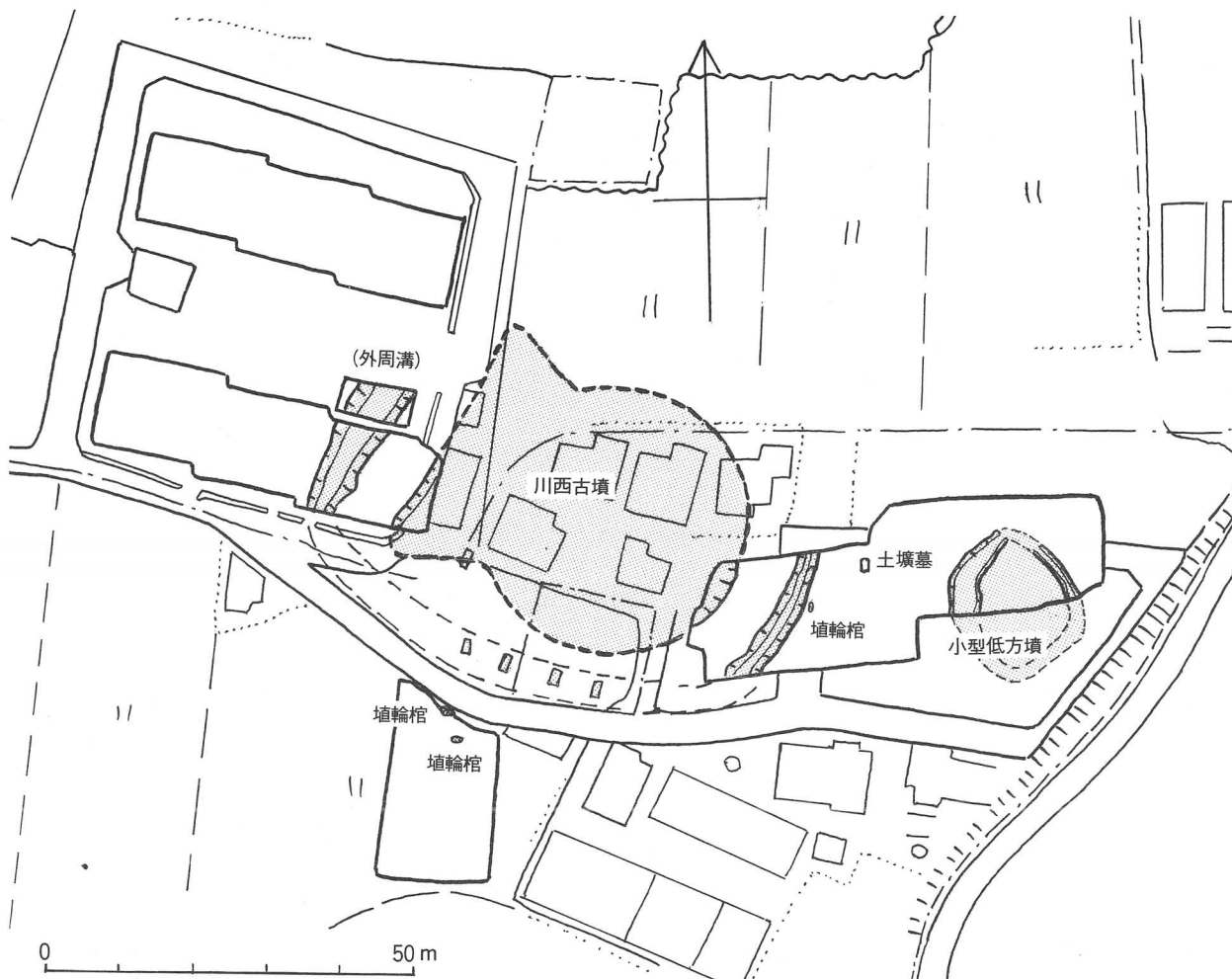


図55「川西古墳群」の墓域構成(文献12 挿図15に一部修正、加筆)

3、溝4)検出されているが、これらは周溝を構成する可能性が指摘されている。もし、これが周溝として成り立つなら、この溝は方形区画墓を構成するものと考えられ、墳丘の状態がわからないものの小型低方墳を取り囲む溝の機能が想定される。なお、溝4からは韓式系土器や土師器、須恵器が出土しているが、それらからみて、この小型低方墳の所属時期は5世紀後半から6世紀に比定できると考えられる。この他、この時の調査区では土壇が1基、確認されている。骨、副葬品の出土はみないものの墓壇の可能性も示唆されている(文献11)。

これらを総合して考えると、「川西古墳」を主長墳としてその下に小型低方墳、埴輪棺墓、そして土壇墓で構成される古墳群としてとらえることが可能である(図55)。そして主長墳に埋納された豊富な副葬品、特に眉庇付冑、短甲などの甲冑一式の他、武器類などの副葬から考えると、この古墳の被葬者は生前、ヤマト政権から軍事的職掌を与えられた在地の小豪族の地位を想定することも可能であろう。また、小型低方墳については溝から出土した韓式土器から考えると朝鮮半島から甲田地域に移住してきた渡来人の存在を、そして円筒埴輪棺については墳丘をもつことが許されなかった人々の墓を、さらに埴輪棺、土器棺すらもつことの許されなかった階層、すなわち、共同体の一般構成員の土壇墓で構成された「川西古墳群」ともいうべき墓域を形成していたと考えられる。

以上が既往の調査における埴輪の検出例であるが、次にこれらの埴輪の状況からみた石川中流域の埋没古墳の存在意義について考えてみたい。

2. 埋没古墳の存在意義

石川中流域に埴輪が検出された地点は、喜志遺跡から錦織遺跡まで点々とではあるが、かなりの数になっている。しかし、「川西古墳群」を除いて、その実態はほとんど解明できていない。

そこで一つの試みとして埴輪の出土地点に古墳の存在を推測させる「塚」のつく小字名を付加した地図(図52, 53, 54)を作成してみた^(註3)。地図で網がけした範囲がそれにあたる。それによると羽曳野市域に「木守塚東」、富田林市の喜志新家町に「平塚」、喜志小学校を中心にして南北560m、東西260mの範囲に「高塚」、川西古墳周辺に南北150m、東西230mの範囲に「ムロヅカ」、錦織遺跡を中心に南北150m、東西290mの範囲に「コエヅカ」という名が残っている。このうち、「高塚」、「ムロヅカ」については、それらが名付けられた範囲から埴輪の出土が認められている。他の地域については、今のところ、埴輪の検出が認められないことから、墓域との関係は分かっていない。また、中野遺跡周辺に「塚」のつく小字名がまったく認められないにもかかわらず埴輪が検出されたり、古墳が存在する場合もある。この他、現存する「新家古墳」に「塚」の名が認められないことは^(註4)、小字名の付けられた当時の周辺の様子、伝承の問題と絡めて考えなくてはならないことを示していて、短絡的に古墳の存在と結び付けられないかもしれない。しかし、古墳が存在した可能性もまったく捨てることはできない。今後の調査を待つて結論を下さなければならない問題の一つである。

さて、従来から、石川中流域には古墳時代中期の古墳が少ないことが指摘されている^(文献1)。やはり今回の埴輪の出土状況をみても、中期でも後半に比定されるものしかなく、中期前半についてはその状況は大きく変わらないことが示されている。しかし、後半期については石川の段丘上に古墳が点在した可能性が指摘できる資料が集まった。そしてそれらの立地を考える時、古墳群は弥生時代以降の農村集落を単位にした勢力基盤をもつ地域ごとにそれぞれグルーピングできることが確認された。すなわち、喜志遺跡の地域に出土例1～9、中野遺跡の地域に出土例10～13^(註5)、そして甲田南遺跡の地域に出土例14～18がそれぞれがあてはまる。これらのうち、喜志遺跡の地域と甲田南遺跡の地域については古墳時代前期からこれらの地域を勢力基盤にしていたと考えられる首長の古墳が、羽曳野丘陵上に築造されていることが指摘されている^(文献1)。このことが、中期後半から後期前半の時期に比定される埋没古墳とどう関係してくるのかは明らかではないが、石川中流域の中期後半の古墳と前期古墳の間には立地に差異が認められるものの、同じ勢力基盤のもとに古墳が形成されているという事実は興味深い。また、その古墳群の構成形態は「川西古墳群」の場合、帆立貝式古墳もしくは円墳の形態をとる首長墳のもとに、それらの形態の古墳を造ることが許されなかった人々の小型低方墳、そして墳丘をもつことが認められないさらに下層の人々の円筒埴輪棺墓、土壙墓という複数の階層の人々で構成されている。おそらく、他の地域についても同様の墓制形態をもつと考えられるが、具体的な状況は分かっていない。しかし、喜志遺跡地域については埴輪の出土量の多さ、そしてそれらの構成から考えて、直径30m前後の円墳が数基、存在していたと想定できるし、おそらく古墳時代前期に所属時期が比定されているような土器棺墓のような土壙墓がこの時期にも認められたことは想像に難くない。中野遺跡地域についても同様で、今のところ、やはり新堂古墳と同時期の土器棺墓が検出されている。

以上のことから総合して考えてみると、5世紀後半から6世紀前半のごく限られた時期に、弥生時代以来の農村集落を勢力基盤にもつ有力家父長を頂点にした共同体構成員の墓域が、集落に近接

して階級を如実に示す複雑な墓制形態をとりながら存在したことが指摘できる。そして埴輪をもつような墳墓が、5世紀前半にはほとんど認められず、5世紀後半に急増する背景として、この時期に社会に大きな変化がおり、有力家父長クラスまで造墓活動が許されたことが推測できる。

さらに石川中流域、段丘上の古墳が築造される背景として、下流域の古市古墳群の存在を考える時、当然、古市古墳群の造営にこの石川中流域の農村集落の構成員が関わりのあったことは推測できる。しかもこれらの中には造墓活動時の労役だけでなく、「川西古墳」の被葬者のようにヤマト政権の軍事的職掌を担う小豪族の出現も認められるのである。

以上のように古墳築造の背景をみてきたが、古市古墳群造営が石川流域の段丘上の集落にどのような影響をおよぼしたのかは具体的に示すことができなかった。さらに6世紀の後半に石川中流域の段丘上に古墳が築造されなくなり、このあと新たな場所に墓域を移していったことを指摘することはできるが、この変化をどのように解釈するかは問題として残したままである。今後の課題としたい。

(栗田 薫)

(註)

1. 図53の分布図の範囲は新堂古墳の検出された位置だけである。この時の調査は実際には南北にもっと長く設定されている。
2. 北野耕平氏の御教示による。
3. 図53の中の清水町に「石塚」という小字名が残っているが、ここは石川の氾濫源にあたり、河原石が多量に積まれてあったという伝承があり、古墳との関係は認められないので図中から省いた。
4. 新家古墳が存在する場所の小字名は「宮口」である。これはすぐ近くにある錦織神社との関連が推測される。
5. 甲田南遺跡については甲田・錦織地区とする方が適切かもしれない。また、出土例13, 14は中野遺跡に含めたが、1994年の大阪府教育委員会が行った大阪府立富田林高等学校の改築に伴う調査で「谷川遺跡」から弥生時代後期から古墳時代の集落跡が確認されている。そのことから考えると中野遺跡と甲田南遺跡の間に谷川遺跡地区をもうけ、そこにこの出土例が属する基盤集落を求めるべきかも知れないが、結論は谷川遺跡の正式報告を待って下したい。

(文献)

1. 北野耕平(1985),『富田林市史』,富田林市史編集委員会。
2. 尾上実(1981),『東阪田遺跡—1979年度第4区の調査—』,大阪府教育委員会。
3. 笠井敏光(1980),『東阪田遺跡—1980—』,羽曳野市埋蔵文化財調査報告書6,羽曳野市教育委員会。
4. 芝野圭之助・渡邊昌宏((1978),『喜志遺跡発掘調査概要』,大阪府教育委員会。
5. 中辻亘・松本徹・栗田薫(1993),『喜志西遺跡発掘調査概要』,富田林市埋蔵文化財調査報告23,富田林市。
6. 玉井功(1982),『中野遺跡発掘調査概要—国道170号線歩道設置に伴う調査—』,大阪府教育委員会。
7. 中村浩(1979),『中野遺跡発掘調査報告書』,富田林市教育委員会。
8. 中辻亘・忍薫(1982),『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』,富田林市埋蔵文化財調査報告7,富田林市教育委員会。
9. 松本徹・田川友美(1992),『平成3年度 富田林市内遺跡群発掘調査概要』,富田林市埋蔵文化財調査報告21,富田林教育委員会。
10. 今村道夫(1981),『新家遺跡発掘調査概要・Ⅲ』,大阪府教育委員会。
11. 阿部幸一(1989),『一府宮双楽住宅建替に伴う—甲田南遺跡発掘調査概要』,大阪府教育委員会。
12. 中辻亘・田川友美(1994),『甲田南遺跡』,富田林市埋蔵文化財調査報告25,富田林市。